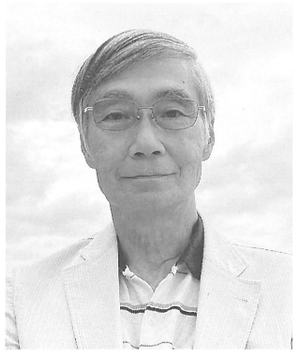
# 大河津分水通水100年　関屋分水50年

代表取締役　鈴木英介



県外の人を新潟市に案内すると、意外に思われることがある。信濃川の幅が狭いという事である。信濃川と言えば日本一の大河だ。その河口があの程度の広さなのかと言われる。

そこで大河津分水が100年前、関屋分水が50年前にでき、ほとんどの水をそちらに落としていると説明する。もともとは、今の万代シティのあたりも川の中だと言うと納得する。

信濃川は長さ367kmで日本一の長さである。流量は年間160億㎥でこれも日本一である。古来より信濃川は暴れ川で、新潟県の平坦地は信濃川の洪水によって生み出されたものだ。そのため酸性土壌が多く、肥沃な大地とは言い難い。しかも低湿地となると、米以外の適当な作物は考えられない。米は水が作る。人はその水を引く田を作る。畑ほど土壌の良し悪しは関係がなく、水が変わるので連作もできる。

水稲耕作は弥生時代に日本に持ち込まれたものだ。越後平野が水稲で埋め尽くされるまで、川の流れも定かならぬ低湿地が広がっていたと思う。そこに見渡す限りの葦が生え、水生植物と柳などの水辺の木々が広がっていただろう。「豊葦原瑞穂の国」とは日本国古来の美称であるが、葦原がなぜ美称になるのか、ずっと分からなかった。古代人にとって、葦があれば水があり、葦自体も家の建築材料として貴重であると同時に、葦を抜いて稲を蒔けば水田となる素晴らしい土地と思えたかもしれない。

日本の国土はおおむね山岳地であり、平地ではその山から流れる川が扇状地を作り、沖積平野を作り、盆地を作り、湖沼を作っている。人々はその狭い平地に、肩を寄せ合い住んでいる。

この越後平野の平坦さは、単なる扇状地とばかり考えられない。長岡より上流は扇状地と言ってもよいと思うが、そこから新潟への平地はほとんど平だ。これは水が海からも来た期間がかなりあったのではないかと想像する。今から126年前、明治29年に現在の燕市横田で堤防決壊による大洪水、「横田切れ」がおこり、越後平野はほとんど水没してしまった。

この「横田切れ」だが、記録のはっきりしている江戸時代以降だけでも17回もあったと言



う。もともと横田よりの下流域は信濃川の川筋が何本もあり、そこに刈谷田川、加茂川、五十嵐川と大きな河川が流れ込んでいる。一度洪水で水に浸かれば、それが排水されるのにはかなりの時間がかかったと思う。また一部は湖沼のままであったであろう。越後平野の海側は何層もの新潟砂丘によってふさがれている。今でも鳥屋野潟水面の海抜はマイナス2．5mで、親松排水機場と鳥屋野潟排水機場でポンプを使って信濃川に排水している。それがないころの亀田郷は地図にない湖と言われていた。電動ポンプがなければ鳥屋野潟以南、亀田までの一帯は水の中だ。

また当社がある上大川前通りも海抜0mである。信濃川と海に挟まれているため、ちょっと掘ると水が湧いてくる。

私が子供のころ、大河津分水はあったが、関屋分水はなく、大雨が降ると市内はすぐ水浸しになり、学校は休校になっていた。当時、青山より先にはあまり人が住んでいなく、「青山砂漠」などと呼ばれていた。舗装道路は団九郎（関屋）で切れ、あとは埃っぽい砂利道が内野町まで続いていた。内野は隣町だ。

風景は時代とともに変わり、人はその風土の中で生きている。

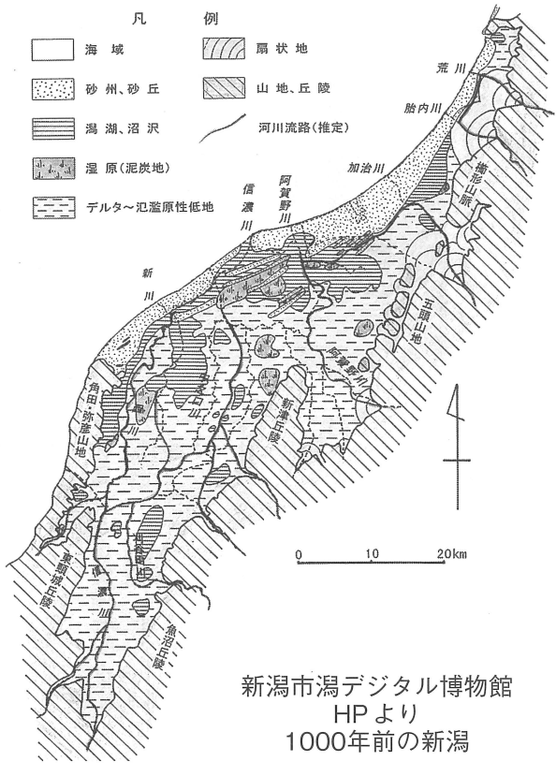
日本は谷間が連なり、山の向こうは別の国だ。島国とはいえ、日本の国家意識も明治以降できたものに過ぎない。今でも「お国は？」と言えば新潟の事だ。明治維新で江戸に進駐した薩摩軍は江戸の人と言葉が通じなかったという。新潟県にもいくつもの藩があったが、国と言えば越後の国だ。

その新潟の風景を変えたのが二つの分水だ。大河津分水によって低湿地は田んぼに変わった。関屋分水ができてからは新潟市内の海岸決壊も止まった。

そして今、越後平野の下には深い谷が埋まっていることを忘れてはならない。山から流れる土砂が谷を少しずつ埋め、沖積平野を作る。その深さはおよそ150mもあるという。

日本列島が太平洋プレートに押され、越後平野にひだを作る。新津丘陵や弥彦角田の山塊、さらには大佐渡小佐渡の山脈、能登の山々まで日本列島が太平洋プレートに押された結果なのだ。我々はその脆弱な地盤の上に生きている。

地球の歴史を見れば、人類の歴史は一瞬間のもの、宇宙の歴史を見れば、地球の歴史も始まったばかりである。人の意識はその環境の上に作られている。




新潟市潟デジタル博物館
HPより
1000年前の新潟